

い草作りとござ作り (和町)

昔、三床山にい草が生えていました。それを、ある人が見つけてきて織ったら、とてもよいござが出来上がったので、い草作りや、ござ作りが始まったと言われています。

豊地区の西部一帯(和田・石生谷・漆原)は、田畑が少なく、後に山を控えた陰地のために、田畑からの収入は乏しく、人々は何か他の収入の道がないものかと工夫を重ねていました。そして、ついに山陰の田を利用してい草を栽培することに成功しました。

い草の栽培は、稲刈りが終わるとすぐ、肌寒い頃に田を耕し、苗床から取ってきた古株を五、六本ずつ、株分けをして田に植えます。

これが一冬越すと、春の暖かい日差しを浴びてぐんぐん成長し、大きな株になると丈が百五十セ

ンチぐらいになります。

七月の上旬頃、晴天めがけてい草狩りが始まります。

刈り取ったい草は色を白くするために、茶色の泥水に浸してから、い草を立てて水を切ります。一夜明けると、朝早く天候を伺いながらい草を干しに干し場へ出かれます。どの家も干しに来るので干す場所がなくなってしまうので大変です。

その翌日、今度は屋根の瓦の上に干します。これを生干しと言いますが、真夏の晴天を選んだ日中の作業なので、仕事中に日まいを起こす人も出ました。出もよく干さないと色もよくないし、長持ちもしないので必死の作業でした。

こうして出来上ったい草を利用して、畳表、うすべり、ござぼうし、飯ござなどが作られ、ござ織りはどの家も盛んでした。

明治時代は手織りでした。細い草を一本一本さす人と織り込む人と二人ペアの手仕事なので



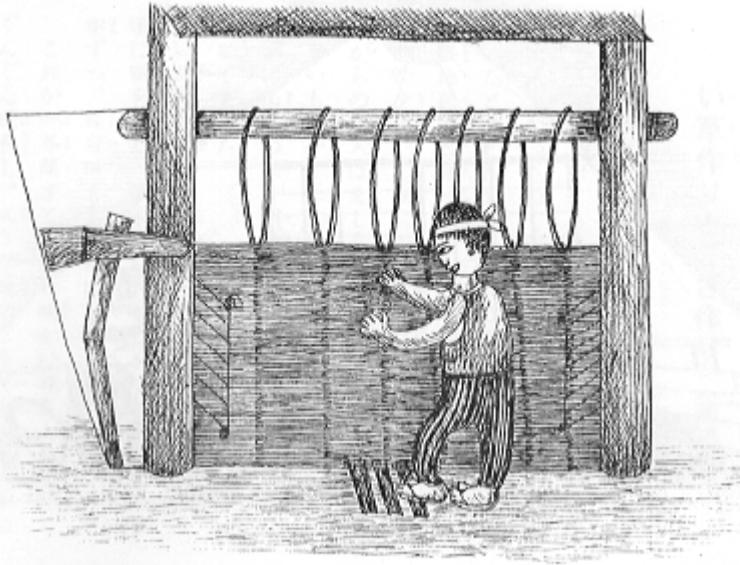
てま
手間がいと言つて、ほかの家に行つたり、また、
その分自分の家にも来てもらつたりして二人で織
りました。

あき
朝は暗いうちから夜おそくまで食事をする時間
も惜しんで働きました。その頃は電気がなかった
ので、うす暗いカンテラの灯をたよりに仕事をし
ました。

がっこう
子供達も学校から帰つてくると、すぐにこの仕
事を手伝い、大人と一緒に夜おそくまで仕事をさ
せられました。

このように仕事の激しい所でしたから、なかなか
かほかの地区からお嫁に来る人がなく、小さな時
から縄網み、ござ織りなど手伝わされ、教え込ま
れて育つてきた村うちの人の方がすぐ間に合い、
都合が良かったこともあり、大抵結婚は村うちで
やりとりをしていました。

あまな
出来上つた製品は、かずき商いと言つて背中
に
ござ製品を背負い、一軒、一軒くまなく売つて歩



きました。製品がすぐにお金になり、とても暮ら
しの助けになったので、武生や福井までかざき商
いに出かけました。

特にうすべりは評判がよくて和田の特産になり、
ほとんどの家がこれで生計を立てるまでになりました。

大正時代の始めに、手編みから足踏機に変わり、
一人でも織れるようになりました。その後、注兵衛さんがこれに更に改良を加え、注箱式織機を考案されたので製品が速く出来るようになりました。

昭和時代になると、自動織機が購入され、注工場が二棟建ちました。また、個人で機械を購入する人もあり、生産高は急速に伸びました。

その頃になると製品は仲買人の手によって、県内は勿論、遠くは北海道にまで出荷されました。

このように、い草は需要が伸びるにつれ、い草の栽培も大々的になり、一時は数町部にもなりま

した。それでも、い草の生産が追いつかず、織田
や白山方面からも買入れようになりました。
そして、和田、石生谷、漆原を中心に藪製品組
合を設立し、原料の購入や、製品の販売、製造技
術の研究を行いました。

しかし近年、い草に代わる科学製品が、どんど
ん開発されてい草の需要も無くなり、今では、い
草づくりも、い草づくりも、昔語りになっていま
いました。

注 たち しょうへえ
館 庄兵衛

館庄兵衛さんと言う方は、当時、県の委
託を受け営農指導員をされていました。
そして、い草産業が盛んであった広島県
や岡山県の方に視察研修に行かれ、ここ
らに帰られて、い草栽培指導にあたりま
した。向こうの生産様式を取り入れ館式
織機の考案など大変力を尽くされました。